

「翼賛」の予行演習

表題は『アエラ』10月24日号の「姜尚中 eyes」。見過ごしてきた鋭い指摘も多いので、「異例の拍手喝采から見る」表題について紹介しておきたい。

衆議院本会議での安倍晋三総理の所信表明演説の最中に、自民党議員による異例のスタンディングオベーションが起こりました。これには自民党出身の大島理森議長も着席を促しましたし、佐藤勉議運委員長も「いいことではない」と記者団に不快感を示しています。

報道によると「演説をもり立ててほしい」と事前に根回しがあり、実際に自民党対メンバーから若手議員に「拍手・起立」のお達しがあったようです。議場の前方に座る若手議員が同じタイミングで一斉に拍手・起立し、それにつられて他の自民党議員も立ち上がった。こういう構図なのでしょう。いまの議会運営のあり方、自民党の国会に対する対応が如実に表れています。

さらに由々しき事態なのは、自衛隊や海上保安庁などに対する称賛が、国会中継がなされているというタイミングでの演出だったことです。海上保安庁、消防、警察も含めた公務員の方々が日々汗を流し、尽力されているということを、国民はよく理解しています。あのタイミングでの喝采は、まさに翼賛だと言えます。

ワイマール憲法下の政府の「決まらない政治」に嫌気がさした憲法学者カール・シュミットは「民主主義は最終的には喝采だ。一人一人の意思表示ではなくて喝采によって意思が表明されなければいけない」という言葉を残しました。そこに登場したのがナチスです。こうあってはならないという過去に起きた事例があるにもかかわらず、今の日本の政治は歴史を忠実になぞっています。

所信表明での出来事は、明らかに陣笠議員が翼賛の一つの数合わせになっているということを我々に示しました(写真は9月26日午後、産経ニュースサイトから)。それは、衆議院本会議がある種、翼賛的なものの予行演習になっているような印象すら抱きました。「喝采をさせる」ということは議会制民主主義の中で、その危うさを知っている人であれば一番やってはいけないことなのです。それをこういう形で若手議員を使ってやっているということが非常に問題です。喝采というものに民主主義をねじ曲げていくのは恐ろしいことです。なぜなら、それこそがポピュリズムなのですから。



(2016年10月29日)